

# 絵本の読み聞かせを用いた保育の展開

Development of Teaching Method for Preschool Education by Using Storytelling

高橋 順子\*

Junko TAKAHASHI

首藤 敏元\*\*

Toshimoto SHUTO

絵本は、幼児の生活にとってさまざまな刺激となり、発達に良い影響を与えうるものであると考えられる。そこで本論では、絵本の「読み聞かせ」を用いた保育実践の展開について報告する。

この実践は、東京都公立幼稚園における3年保育4歳児（男児14名、女児5名、計19名）を対象に行なわれた。期間は、2006年10月4日から11月30日である。最初に、文献と幼児の実際の姿から、教材として絵本を選ぶポイントを明確にした。次に、明確になった「主人公と幼児が一体化しやすい」「幼児の体験とつながる内容」「協同的な体験に結ぶつきやすい内容」の3つのポイントを踏まえて絵本を選択し、読み聞かせを行なった。最後に、読み聞かせ後の幼児の姿や活動について記録し、教材としての絵本について考察した。この実践の結果、教材としての絵本を選ぶポイントを挙げ、「一体化」や「協同的」をキーワードに保育者が絵本を下読みすることで、読み聞かせ後の保育の展開の手がかりを得ることができた。

キーワード：保育、幼児、絵本、協同的活動、教材開発

## 1 はじめに

絵本は、日本の幼児にとって身近な存在であると考えられる。地域の図書館に行けば、多くの絵本が書架に陳列され、自由に手に取れる環境にある。また、近年、ブックスタートは0歳児から奨励する傾向にある。生後数ヶ月後から、養育者の声により、絵本の読み聞かせ（以下「読み聞かせ」）を体験している幼児も少なくない。さらに、幼児は、地域、幼稚園や保育所など集団での読み聞かせも体験している。このような状況から、絵本は、幼児の生活にさまざまな刺激となり、発達に影響を与えると考える。

そこで、幼児にとって身近な存在である絵本、特に「読み聞かせ」を用いた保育の展開は、有効な方法であると考え、保育実践してきたことを報告したい。

## 2 教材として絵本を選ぶポイント

絵本の種類には、日本の昔話、世界の昔話、創作の話、図鑑などがある。これらの絵本を、個と集団の育ちという2つの側面を踏まえ、教材として選ぶポイントについて述べる。

\* 千代田区立幼稚園

\*\* 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

日常の保育の中で、保育者が日本の昔話、世界の昔話、創作の話などを読み聞かせしたとき、一人ひとりの幼児は、主人公と一緒に冒険した気持ちをもちながら、ドキドキしたり、ホッとしたりしながら、さまざまな感情をもち、話の世界を楽しんでいる姿が多く見られる。松岡（1996）は、「わたしは、この『主人公との一体化』という点が、子どもの文学と大人の文学を、わけているものであるとすれば、最大のものだという気がします」（p.73）と述べている。また、幼児自身が、絵本を選ぶこともしばしばある。例えば、幼児が園庭で遊んでいたら、カタツムリを見つける。「カタツムリを飼いたい」という気持ちになり、図鑑でカタツムリの飼い方を調べる。友達と飼育ケースを準備したり、餌になるものを確保したりして、科学的な芽生えとなる体験をしている姿などもみられる。このようなことから、絵本を通して、ひとりひとりの幼児が、さまざまなことを感じたり、考えたりし、想像力を広げたり、知識をもったりするといえる。

幼児教育における集団での読み聞かせには、次のような意義がある。岩立（2006）は、「幼稚園教育は個々の子どものよさを十分に認めながら、友達と共に活動するなかで楽しさや一体感をもてる経験、集団や仲間のために行動し、役に立つ喜びを感じたり、集団や仲間から承認され、認められるという喜びを感じたりすることのできる経験、また、よく分かる、うまくできる、話し合える、共に考え、問題解決するなどの学びの満足感を感じることができると生み出す活動を構想、実践しながら、協同性をはぐくむことを目指してきました」（p.9）であるとし、幼児教育の協同性の重要性について述べている。高橋・首藤（2005）は、幼児教育における集団での読み聞かせは、協同の態度の芽生え、やがては、共同思考への参加への態度へとつながることを説明している。

したがって、個と集団の両面の育ちをはぐくむために、教材として絵本を選ぶポイントは、主人公と幼児が一体化しやすい、あるいは、幼児の体験とつながる内容、さらに、協同的な体験に結ぶつきやすい内容であることといえる。

### 3 読み聞かせから展開した実践

この実践は、東京都公立幼稚園、3年保育4歳児（男児14名、女児5名、計19名）を対象に行なった。実践記録の期間は、2006年10月4日から11月30日である。記録は、日常の保育から「絵本の読み聞かせを用いた保育の展開」にかかわる部分を抜粋した。

実践方法は、「2 教材として絵本を選ぶポイント」を踏まえ、幼児の実態に合わせ絵本を選び、「一体化」や「協同的」をキーワードに絵本を下読みし、指導案作成し、対象児に読み聞かせをした。そして、読み聞かせ後の幼児の姿や活動について記録し、教材としての絵本について考察した。

#### 3-1 読み聞かせ『とんぼのうんどうかい』

読み聞かせ『とんぼのうんどうかい』を表1の指導案に沿って実践した。

表1 『とんぼのうんどうかい』の読み聞かせの指導案

実施日：2006年10月4日 水曜日		
<p>幼児の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 併設している小学生の運動会の様子みて、興味・関心をもち、まねして、かけっこや玉入れを繰り返し楽しんでいる姿が多く見られる。</li> <li>○ フルーツバスケットやドンジャンケンなど簡単なルールのある遊びを楽しむ姿が多く見られる。</li> </ul>		
<p>ねらいおよび内容（○印＝ねらい ・印＝内容）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 運動会に興味・関心をもち自分も参加しようとする。</li> <li>○ カ一杯やったり、みんなと一緒に力を合わせたりすることの楽しさを感じる。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 運動会のいろいろな競技に興味をもち、やってみようとする。</li> <li>・ 友達と声を合わせたり、共感したりする。</li> </ul> </li> </ul>		
<p>準備教材</p> <p>絵本：『とんぼのうんどうかい』</p> <p>文・絵： かこ さとし</p> <p>偕成社</p> <p>1972年</p>	<p>環境構成</p> <div style="text-align: center;"> </div>	
時間	予想される幼児の活動	指導上の留意点
11:10	<ul style="list-style-type: none"> <li>○片付けをし、手洗いうがいを済ませ、自分でいすをもって集まる。</li> <li>○絵本の表紙や中表紙を見ながら、自分の知っている思いや、食べたことの体験などを思い浮かべ、話が始まることに期待をもつ。</li> <li>○「さあ、さあ、あかとんぼのこどもはいらっしゃい…（略）…」などあかとんぼの先生が、赤とんぼの子どもに語りかけているところを、日頃の園生活と結びつける。</li> <li>○鈴割や綱引きの場面では、これまでの経験でしたり、見たりしたことと結びつけ、自分もやってみたくなる。</li> </ul> <p>「オーエス オーエス」と掛け声をかける幼児もいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○片付けを終えた幼児から、手洗いうがいをするように促し、終わった幼児から座るように言葉かけをする。</li> <li>○絵本の表紙をみせ、絵本が始まることに期待をもたせるとともに、話の内容に興味をもてるように、ゆっくりページをめくる。</li> <li>○幼児が、スムーズに話しに世界に入れるように、保育者は赤とんぼの先生になりきって読む。</li> <li>○鈴割や綱引きの場面では、「べにちゃん がんばれー」「オーエス わっせ」「ばんざーい」など、幼児が赤とんぼの子どもと一体化しやすいように、日頃のクラスの雰囲気大切に読む。</li> <li>○ぎゃんぐこうもりが出てくる場面では、話が展開し、ストーリーが楽しめるように、</li> </ul>

<p>11:20</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ぎやんぐこうもりが出てくる場面では、話が展開したことを感じとる。</li> <li>○ぎやんぐこうもりと赤とんぼの子どものやり取りの場面では、ストーリーの面白さがわかり、楽しむ。</li> <li>○最後のページのおうちに帰る場面では、安心した気持ちを感じる。</li>   <li>○背表紙や表紙を見て、絵本の余韻を楽しむ。</li>   <li>○「つなひき、前やったことあるよ」「つなひき、やりたい」など、出てきたことに興味をもち、自分たちも絵本に出てきた競技や運動会の意欲をもつ。</li> </ul>	<p>ぎやんぐこうもりと赤とんぼの子どものやりとりがわかりやすいように、読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○最後のページのおうちに帰る場面では、運動会を終えた赤とんぼの子どもの満足感や安心感を感じ取れるように、静かに読み終える。</li> <li>○余韻を楽しめるように、ページをゆっくりめくり、背表紙を良く見せる。再び、表紙をみせ、題を読み、みんなで絵本をみた楽しさを味わえるようにする。</li>   <li>○幼児の言動を取り上げ、運動会に期待をもてるようにする。</li> </ul>
--------------	---	---

<読み聞かせ『とんぼのうんどうかい』後の保育の展開>

運動会は、2006年10月21日 土曜日に実施された。

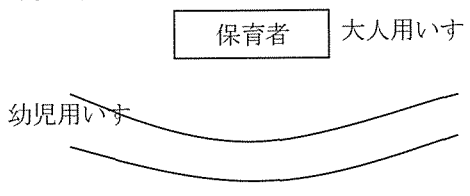
4歳児は、かけっこ、親子リズム、玉入れの3つの種目を行なった。絵本を読んだことを活かして、種目を絵本に出てくる綱引きや鈴割にすることも考えたが、安全面や繰り返して遊びやすさを考慮し、玉入れをすることにした。運動会までの幼児の姿としては、自分が何チームか分かり、その同じチーム玉入れの前には、「エイ、エイ、オー」などと友達と声をそろえて喜んでいる姿が多く見られた。その後、運動会后、リレーや鬼遊びなど、友達と力を合わせて遊ぶことを楽しむ姿が多く見られようになった。

教材として、『とんぼのうんどうかい』は、運動会というテーマで描かれた内容であり、幼児の体験と結びやすい内容であったと思われる。登場する赤とんぼの子どもと先生は、幼児にとって日頃の園生活と結びつくことが多く、一体化しやすい教材であったと考える。文中に「べにちゃん がんばれー」「オーエス わっせ」「ぼんざーい」など友達と声を合わせたり、力を合わせたりにしている部分が多くあり、幼児にとって、協同的な体験に結びやすいものであったと考える。

### 3-2 読み聞かせ『さつまのおいも』

読み聞かせ『さつまのおいも』を表2の指導案に沿って実践した。

表2 指導案：絵本の読み聞かせ『さつまのおいも』

実施日：2006年10月26日 木曜日		
幼児の実態 ○ 運動会頃から、学級のみinnで活動に喜んで参加するする姿が多く見られるようになった。 ○ 花壇の花に水をやったり、土の中の幼虫を探したりして、身近な自然には興味をもっている。 ○ 作物についての経験は、5月にトマトの苗を植えている。土の中になる作物の経験はない。		
ねらいおよび内容（○＝ねらい ・＝内容） ○ 学級のみinnと絵本を楽しみ、明日の芋ほり遠足に期待をもつ。 ○ 土の中の作物に興味・関心をもつ。 ・ みんなで遠足に行くことがわかり、参加しようとする。 ・ 芋が土の中にあることを知り、掘り方などに興味をもったり、考えたりする。		
準備教材 絵本：『さつまのおいも』 文： 中川 ひろたか 絵： 村上 康成 童心社 1995年	環境構成 	
時間	予想される幼児の活動	指導上の留意点
13:30	○片付けをし、手洗いうがいを済ませ、自分でいすをもって集まる。 ○絵本の表紙や中表紙を見ながら、自分の知っている思いや、食べたことの体験などを思い浮かべ、話が始まることに期待をもつ。 ○絵を見ながら、芋がご飯を食べたり、歯磨きをしたりなど幼児の生活と似ている場面では、幼児が自分の体験と結びつけて、絵やストーリーを楽しむ。 ○芋は畑に行って、お芋と綱引きする場面では、つなひきの体験など	○片付けを終えた幼児から、手洗いうがいをするように促し、終わった幼児から座るように言葉かけをする。 ○絵本の表紙をみせ、絵本が始まることに期待をもたせるとともに、話の内容に興味をもてるようにする。 ○芋がご飯を食べたり、歯磨きをしたりなど幼児の生活と似ている場面では、幼児の反応を見ながら、ゆっくり、ページをめくる。 ○お芋と綱引きする場面では、みんなで一生懸命引っ張っている様子が感じられるよう

	<p>と結びつけ、楽しむ。</p> <p>○焼き芋の場面では、昨年度の「焼き芋会」などの経験と結びつけ、楽しむ。</p> <p>○焼き芋を食べ終わった後、「プーッ」「くさーい くさーい」などの場面では、ストーリーの面白さがわかり、喜ぶ。</p> <p>○背表紙や表紙を見て、絵本の余韻を楽しむ。</p>	<p>に読む。</p> <p>○焼き芋の場面ではみんなで、和やかに食べている雰囲気を出して読む。</p> <p>○焼き芋を食べ終わった後、「プーッ」「くさーい くさーい」などの場面では、ユーモアを感じられるように読む。</p> <p>○余韻を楽しめるように、ページをゆっくりめくり、背表紙を良く見せる。再び、表紙をみせ、題を読み、みんなで絵本をみた楽しさを味わえるようにする。</p>
13:40	<p>○先生の話聞き、明日の芋ほりの方法について知る。</p> <p>○「どうやって、掘ろうか」などに対して、「手で掘る」「指に入れた、ギュウってする」「穴ほれるよ、お砂場でやったから」など自分なりに、芋ほりの仕方を考える。</p>	<p>○絵本から、明日の芋ほりの遠足の話始める。</p> <p>芋がご飯を食べたり、歯磨きをしたりなど幼児の生活と似ている場面やお芋と綱引きする場面などを取り上げ、芋ほりに期待をもたせる。</p> <p>○芋は土の中になっていることを話題にしたり、「どうやって、掘ろうか」などと聞いたりして、もちものなど明日の遠足に具体的なイメージがもてるようにする。一人ひとりの考えたことを認め、明日の遠足に期待をもたせる。</p>
13:45	<p>○明日の遠足に期待をもち降園準備をする。</p>	

<絵本の読み聞かせ『さつまのおいも』後の保育の展開>

2006年10月27日 金曜日には、遠足を実施した。

行きのバスの中では、みんなで遠足に行く楽しさを味わえるような雰囲気作りや、芋ほりに期待をもたせるような事前指導をした。具体的な内容としては、「やきいもグー、チー、パー」の手遊びや「お芋は、木になっている。○それとも×どっちでしょう？」というような「お芋クイズ」などであった。

芋畑に着くと、保育者の話を聞きながら、ほとんどの幼児が、芋を入れる袋を出すなど、自分で芋ほりの準備ができた。保育者が、幼児一人ひとりに、それぞれの掘る株を知らせると、自分で積極的に土にさわって、芋を掘る姿が多く見られた。「みて、みて」と掘れた芋を友達や教師に見せ合っていた。土を掘ったことで、ミミズや幼虫を見つける幼児もいて「これ、なんの幼虫かな？」とつぶやく幼児もいた。芋ほりが終わり、手を洗うときに、芋のつるの灰汁で、なかなか指先の

汚れが落ちない幼児もいた。

前日に、『さつまのおいも』読んだことで、幼児は、芋ほり遠足に期待をもち、喜んで参加したと思われる。絵本を通して、幼児は、芋ほりのイメージが友達共有しやすく、みんなと一緒にいくという意識が高まったり、芋が土の中になっているという知識を得たりしたと思われる。さらに、バスの中の手遊びやクイズを楽しむことにより、友達と一緒に遠足に行く楽しさが増したものと考えられる。『さつまのおいも』の読み聞かせと芋ほり遠足を通して、幼児が経験したことは、みんなで芋ほりという体験を共有し、一緒に活動する楽しさを味わったこと、土に触れたことで、土の感触を味わったこと、土の中になる作物や土の中にいる生き物に気付くこと、そして、収穫の喜びである。

2006年10月30日 月曜日には、一斉の形態で芋ほりの絵を描いた。一斉の形態で行なう理由は、再び、みんなで芋ほりという体験を共有し、一緒に活動する楽しさを味わってほしいためである。また、絵を描く活動を選択した理由は、芋が土の中になっていることに気付いたことや収穫の喜びをさまざまな方法で表現して欲しい考え、絵を描く活動を取り上げることにした。幼児全員が描き終わると、保育室に、全員の絵をと芋ほり遠足のときの集合写真を掲示した（写真1）



写真1 芋ほりの絵

2006年10月下旬から、幼児が、自由形態の保育の中で、人形劇ごっこ「お芋とつなひき」を繰り返し楽しむ姿がみられるようになった。始めは、A児が新聞紙を芋の形のように丸め、紫の色の紙で巻き、そこに緑色のモールをつけ、つるにし、芋を作った。同じものを3個作ると、アライグマのパペットを持ってきて、芋を掘る動作をした。そこで、保育者は「人形劇しようか」と言葉かけをし、幼児が「人形劇にする」と答えたので、保育者は人形舞台を用意した。人形劇の舞台には、畑に見立てられるように、茶色の不織布をかけた。また、芋が土の中に入っているようにするために、客席側からみえないように、舞台の裏側に箱を貼り付け芋を隠すようにし、つるだけ見えるように、仕掛けをした。ストーリーは、幼児が即興に考えるものであった。しかし、その大筋は、ウサギ、アライグマなどが順番に出てきて、『さつまのおいも』の綱引きの場面のようになり、登場人物が力を合わせて芋を抜くというものであった。さらに、「焼き芋会」を終えると、掘れたお芋を焼き芋にして食べるというストーリーも加わった。

2006年11月15日 水曜日には、「やきいも会」を実施した。

幼児が、芋ほり遠足で掘った芋を、洗い、切り、濡れ新聞紙に包み、アルミホイルを巻き、焚き火の中に入れた。焼きあがると、学級のみんなで一緒に、喜んで食べた。

教材として、『さつまのおいも』は、絵本のはじまりに、芋がご飯を食べたり、歯磨きをしたりなど幼児の生活と似ている場面があり、絵本の始まりから幼児が一体化を感じるものであったと考える。綱引きや焼き芋の場面では、幼児にとって、協同的な体験に結びやすいものであった。2006年10月下旬から、自由形態の保育の中で、人形劇ごっこ「お芋とつなひき」を繰り返し楽しむ姿は、幼児が自ら協同的な学びをしていると考えられる。

#### 4 考察と今後の課題

幼児にとって身近な存在である絵本、特に「読み聞かせ」を用いた保育の展開は、有効な方法であると考え、保育実践してきた。集団での読み聞かせに際して、より良い環境構成を行なうために、教材として絵本を選ぶポイントを挙げたことにより、絵本を選択する意図が明確になった。また、「一体化」や「協同的」をキーワードに保育者が絵本を下読みすることで、読み聞かせ後の保育の展開の手がかりを得ることができた。

今後は、他のキーワードを考え、教材としての絵本を選択し、質の高い保育への展開となるようにしていきたい。

#### 文 献

- 岩立 京子 2006 幼少をつなぐ協同的学び 幼稚園じほう 第34巻 第7号 平成18年10月号 全国国立幼稚園園長会事務「時報部」
- 高橋 順子・首藤 敏元 2005 幼児教育における集団での絵本の読み聞かせ 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 No. 4, 165-176.
- 松岡 享子 1996 えほんとかどものせかい 東京子ども図書館